

新潟県小中学校教頭会

会報

No. 184

目次

- 副会長あいさつ 1
- 県教頭会研究大会に向けて 2～3
- 全公教埼玉大会参加報告 4
- 郡市教頭会ネットワーク 5～6
- 新入会員の声 7～8
- 特集「学力向上」 9
- 随想 10



「学校における働き方改革」は 一つの手段

新潟県小中学校教頭会

副会長 **西本直史**

(長岡市立表町小学校)

「日本の学校に来て、先生と子どもと一緒に掃除をすることに驚きました。自分たちが使う場所を自分たちできれいにすることは、とても良いことですね。」

以前、勤務した学校で出会ったアメリカ出身のALTから清掃について聞いたことがあります。そのとき、当たり前だと思っていた「校内の清掃」が、世界的には当たり前ではないということに初めて認識したことを覚えています。

今年の8月2日、3日、4日とさいたま市で第59回全国公立学校教頭会研究大会埼玉大会が行われました。初日のシンポジウムで、コーディネーターの杉田洋氏（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）から、次のような話がありました。

「日本の教員の地位が下がりがつつある。日本の教育予算は、OECD加盟国の中でワースト3に入るが、教育レベルはトップクラスである。日本の先生方にもっとプライドをもってもらいたい。近年では、シンガポール、モンゴル、オマーン、エジプトで、日本式教育の『日直』『学級会』『清掃』といった『特別活動(TOKKATSU)』が導入されてきている。一人一人が認められ、リーダーの役割をみんなが経験できる教育が重視されつつある。授業だけでなく、休み時間や給食、清掃、課外活動までも含めた全ての活動において人間形成を目指すところに日本式教育のすばらしさがある。」

同じ頃、文部科学省が「学校における働き方改革特別部会(第2回)」を開催しました。藤原文雄総括研究官より提示された「諸外国の学校の役割と教職員等指導体制の比較」資料には、日本を含め、アメリカ、イギリス、ドイツ、韓国等の8カ国の「教職員の分業体制の見直し」の一覧表があります。そこには、児童生徒の指導に関わる業務の中で、ほとんどの国では担当していないが、日本を含めたごく

少数の国の教職員だけが担当している業務がいくつか示されています。その中には、「登下校の時間の指導・見守り」、「給食・昼食時間の食育」、「校内の清掃指導」などが示されています。

それでは、学校における働き方改革として「校内の清掃」や「給食・昼食時間の食育」を業務の見直しの対象とすべきなのでしょうか。

学校における働き方改革がいよいよ動き出しています。文部科学省の中央教育審議会でも「学校における働き方改革に係る緊急提言(案)」を公表し、30年度予算において取り組むべきと明記しました。

各学校においても、子どもと向き合う時間の確保のために、これまでの業務の見直しや勤務時間を意識した働き方が進められていることと思います。教頭は、管理職として組織管理や時間管理などの校務全体のマネジメントを進めなければなりません。重要なのは、どのような視点で業務改善を進めていくのかを明確にすることです。

緊急提言(案)の前文には、「人生100年時代」を見据え、政策の主軸となるのは「人づくり」であり、予測困難な未来社会を自立的に生き、社会形成に参画する資質・能力を育成するため新学習指導要領等を確実に実施し、学校教育の改善・充実に努めていくことが必要不可欠であると述べられています。そのために、授業改善をはじめとする教育の質の確保・向上を目指して、学校における働き方改革を早急に進めていく必要があります。

学校における働き方改革は、あくまで手段です。超過勤務時間を削減し、教職員がいきいきと児童生徒と向き合い、限られた時間の中で最大限の効果を上げられるような働き方が求められています。子どもたちの将来のために何を改善できるのか、全職員で議論していくことが必要なのではないでしょうか。

県教頭会研究大会に向けて

～未来に向かって
組織として確実な一歩を～



上越・妙高大会実行委員長

野口 浩二

(上越市立下黒川小学校)

第53回新潟県教頭会研究大会上越・妙高大会の開催が迫ってまいりました。主管を務めます上越市・妙高市両教頭会の実行委員会メンバーは、日々の業務の傍ら、研究大会当日の円滑な運営に向けて、最後の調整を入念に行っているところです。先の教頭会会報No.183でもお知らせしました「研究大会の目指すもの」に沿いまして、私たちが準備している研究大会の概要を今一度ご紹介します。

1 第53回上越・妙高大会で目指すもの

(1) 研究主題 第11期全国統一研究主題

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

○キーワード：自立・協働・創造

○県教頭会サブテーマ

「主体的に学び、たくましく生き抜く子ども
を育む学校づくり（1年次）」

(2) 研究大会における6課題☆

○第1課題：教育課程に関する課題

○第2課題：子どもの発達に関する課題

○第3課題：教育環境整備に関する課題

○第4課題：組織・運営に関する課題

○第5課題：教職員の専門性に関する課題

○第6課題：教頭の職務内容や職務機能に迫る
課題

平成26年度から平成28年度まで実施された第10期の研究実績の総括を経て、平成29年度より新しく始まる第11期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」を受け、本研究大会では県教頭会サブテーマを「主体的に学び、たくましく生き抜く子どもを育む学校づくり（1年次）」と設定しました。「主体的に学び、たくましく生き

抜く子ども」とは、大会要項の“研究大会の目指すもの”にも示しましたように“多様な個性・能力を伸ばし、充実した生活を主体的に切り拓くことができる”「自立」する子ども、“個人や社会の多様性を尊重し、ともに支え合い、高め合うことができる”

「協働」する子ども、そして“自立・協働を通じて新たな価値を創造していくことができる”「創造」する子どものことでもあります。

私たち、教頭は平成29年3月31日に文部科学省より公示された次期学習指導要領の目指す内容をきちんと念頭に置き、校長の示すビジョンを具体化しつつ、組織として学校教育に取り組んでいかなければなりません。そのためには個々の研究を日常化し「研究の継続性による成果と課題の焦点化」・「研究の協働性の充実」・「教頭の関与性の明確化」の達成に向けて努力することが大切です。そして会員一人一人がそれぞれに参加意識を高め、研究成果や課題が共有されることを通して、個々の学校現場を活性化し、総じて新潟県教育の発展に貢献していくことを目指していきましょう。

平成31年度開催予定の関東ブロック教頭会研究大会新潟大会に向けて、本研究大会は左記の6課題別に14分科会での開催としました。各分科会における提言者の皆様方には研究の推進と発表へのご尽力に心より感謝申し上げます。またその提言を支えていただきました担当郡市教頭会の皆様方にも同様に感謝申し上げます。

あるアメリカの経営学者が提案した教育の評価法のモデルによると「レベル1：研究大会に参加したことに満足する」「レベル2：学んだことで新たな知識や技能を習得する」「レベル3：実際の現場での行動変容、恒常的な行動変容が見られる」「レベル4：学校組織全体の業績や成果が上がる」という項目内容が示されています。もちろん私たちは“レベル4”を目指して本研究大会に臨み、充実した研究大会となるように会員一人一人が努力していきましょう。

2 学校現場の現状と課題解決への取組

さて、平成26年度に開催された第50回新潟県小中学校教頭会研究大会50周年記念新発田・胎内・北蒲大会においては、私たち県教頭会は会員数738名の組織でした。それが3年を経た本年度は、すでに20名以上の会員数減（学校数減）という厳しい現実には私たちは直面しています。上越地域では特に、中山間地域を学区にもつ学校が多く、毎年のように「統合」「閉校」等の課題が学校現場でも語られています。人口減、児童生徒数減という大きな課題はもはや他人事して見過ごすことができない状態です。

ある学校が閉校または統合するということは、周りの学校や、統合された新しい学校の教頭の業務負担が増加することにもつながります。私はこの課題に対して、郡市教頭会単位での対応や、さらに身近な中学校区単位での対応等、早急に対策を進める必要があると感じています。当該校の教頭のみが苦勞するのではなく、近隣校の教頭同士が親密に連携・協働することで、新しい学校の教育活動が円滑に進められ、児童生徒が明るく不安なく学校生活をスタートすることができるようにしていかなければなりません。その中心・中核として私たち教頭が重要な役割を果たしていく必要があります。

例えば上越市では、数年前より1中学校・1小学校の中学校区に対して「小中一貫教育モデル校」として研究指定を設け、教職員交流や年間カリキュラム、校時表等の教育課程全般について9年間を見通した視点での研究に取り組み始めています。平成31年度までには市内全ての中学校区に研究指定が行き渡る予定で、1中学校・複数小学校の大規模中学校区においても、先行研究を参考にした取組が進められているところです。この研究を進めることで、閉校・統合後の学校運営について中学校区全体で動くことが可能になっているところもあります。

また、この「小中一貫教育」を進めるにおいても重要な役割を担うコミュニティースクール（学校運営協議会設置校）への移行については、上越市では平成23年度に市内小中学校一斉に実施をしています。コミュニティースクールの導入については教育再生実行会議第十次提言（H29.6.1）においても、推進すべき項目として取り上げられています。

これらの新しい取組についての学校現場における推進役はもちろん各校の教頭であります。このように私たち教頭は、臆することなく常に未来に向かって新しい一歩を踏み出す覚悟で業務に当たる必要があります。本研究大会が、そのような一歩を踏み出す貴重な機会となれば幸いです。

3 ようこそ上越・妙高の地へ

最後になりましたが、本研究大会開催地、上越市・妙高市について少し紹介します。

上越市・妙高市がある“くびき平野”は日本百名山としても有名な別名越後富士、妙高山の麓に広がる自然豊かな地域です。また、上杉謙信公で知られる春日山城や開府400年を超える名城、高田城に代表される歴史と伝統文化の栄えた地域としても発展してきました。上越市は約20万人、妙高市は約3.3万人の人口をもつ地方都市で、日本海に面する旧直江津市の海岸から標高2000Mを超える山岳地まで、多種多様な自然の宝庫に恵まれた豊かな地域であり、海の幸から山の幸まで手軽に堪能することができます。一方でこの地域は、昔から交通の要地としても有名で、旧加賀街道の杉並木は今でも当時の面影を残しています。現在では、車では北陸道自動車と上信越自動車道の分岐点があり、鉄道では北陸新幹線の金沢延伸開通により、さらに首都圏・北陸地域との利便性が増しています。

この度、このような上越市・妙高市において新潟県全域から、714名の会員をお迎えし、本研究大会が開催できますことを心より感謝申し上げます。

円滑な大会運営に向けて昨年度より、上越市教頭会74名、妙高市教頭会11名全員で実行委員会を組織し、準備を重ねてきました。諸般の事情から分科会会場が複数個所となり、さらに市内各所に分散しての開催となってしまったことで、会員の皆様方には移動等で多大なご不便をおかけすることとなりましたことを、心よりお詫び申し上げます。

新潟県の南西端、上越市・妙高市の開催となります。遠方よりお越しいただくのが大変申し訳ございませんが、くれぐれも道中お気をつけてご参加ください。当日、会場でお待ちしております。

全公教埼玉大会参加報告



未来を拓く学校教育

藤田 敏樹

(加茂市立須田小学校)

埼玉大会は、研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」のもと①シンポジウム、②分科会、③記念講演の3日間の日程で行われました。

初日の全体シンポジウムは「きめ細かで質の高い教育を推進し、未来へ飛躍するグローバル人材をめざして」というテーマでした。その中で「グローバル人材とは、単に英語の力があればよいということではなく、お互いの差異を認め合えることが大切である。」「グローバル人材を育てるには指導者がグローバルでなければならない。」という言葉が心に残りました。

2日目の第6分科会では、「魅力ある副校長・教頭職のあり方」をテーマに、まず昨年度の全公教の調査結果の報告、政策提言文の解説がありました。その後、それを基にして秋田や東京、埼玉など7名のメンバーのグループで各地の実態や取組について情報交換をしました。その中で、ミドルリーダーがあこがれる存在になるために、『『大変さ』を見せるのではなく、生き生きと仕事を推進し組織を動かしている姿を見せること。』『『あとで』でなく、『すぐに』の対応をすること。』ということなど、教頭としての大切な姿勢を再確認しました。

最終日の記念講演では、2015年にノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章氏による「ニュートリノの小さな質量～神岡地下での研究～」についての講演でした。ニュートリノそのものについてのお話は難しかったのですが、「理論値と実際の観測値の違いから疑問をもち、チームで協力をしながら地道な研究を長年続け、それがニュートリノ振動の発見につながった。」というお話が心に残りました。

日本の第一線で活躍されている方々、日本全国の副校長・教頭のお話をお聞きする中で、これからの「未来を切り拓く学校教育」についてじっくりと考える大変よい機会となりました。



チームワークの大切さ

前田 敏之

(新潟市立横越中学校)

さいたまスーパーアリーナに全国から3,000人の副校長・教頭が集まり、地元中学校混成合唱団による「旅立ちの日」等の合唱や秩父屋台囃子の演奏の後、大会がスタートしました。

初日のシンポジウムでは、グローバル人材について、埼玉県にゆかりのある著名人をシンポジストに迎え、経験と学識に基づいた意見を聞くことができました。英語によるコミュニケーション力の向上に重点が置かれているが、互いの差異を認め、受け入れることに力点をおくべきであるということが伝わるシンポジウムでした。また、教師集団が互いに差異を超えて同僚性を発揮している姿を見せることで、子どもたちにも意識が広がるという意見が印象的でした。

2日目の分科会「教育環境整備に関する課題」では、小中連携、地域連携、地域人材活用をキーワードに秋田県、東京都、埼玉県の教頭会から提案がありました。地域における課題解決に向けて、校長会の指導・助言を受けつつ、教頭同士がチームを組んで指導力を発揮すること、教職員に任せることを決め、当事者意識を高めること、何よりも「子どものためになっているのか」を判断基準にすることなどが提案され、教頭としての大切な心構えを学びました。

最終日記念講演は、2015年ノーベル賞を受賞した東京大学 卓越教授 梶田隆章氏による「ニュートリノの小さな質量」でした。ニュートリノの研究を目指すことになった経緯や苦労話、ニュートリノとは何か等の話を通して、チームワークの経験が必要であること、すぐに役立たなくても純粹に不思議に思って研究することの大切さを説いていただき、学校教育に関わる教頭にとって示唆に富んだ講演でした。「あまりにも小さいニュートリノの研究が大きな宇宙をより深く理解する道となる」という言葉にスケールの大きさとロマンを感じました。いただいた機会を教頭業務に生かしたいと思います。

都市教頭会ネットワーク



ともに学ぶ教頭会

柏崎市刈羽郡小中学校教頭会
研修部長 佐藤 優一
(柏崎市立鏡が沖中学校)

柏崎市刈羽郡小中学校教頭会は、小学校21校、中学校13校、中等教育学校1校の計35校で組織されています。柏崎市教育大綱、刈羽村教育大綱を踏まえ、教頭会の一員として、学校をリードする教頭として、実のある研修を行うとともに互いの親睦を深めています。

年8回実施する定例教頭会は、研修が中心です。研修は、全体研修とブロック別研修があります。全体研修は、今日的教育課題に関するものを中心に年4回行います。教育課題として、教育行財政、道徳教育、キャリア教育、学校を取り巻く法的課題に対する対応などを取り入れています。講師として、上越教育大学准教授や弁護士から協力を得ています。また、教育長、教育部長、校長からご講話をいただき、行政や校長の立場から教頭に求めることをご指導いただいています。ほかに、県外研修報告などを行います。

ブロック別研修は、研修テーマに関わる実践を中学校区ごとに持ち寄り、実践発表と意見交換を2回に分けて行います。これらを「教頭会研修の記録」として冊子にまとめています。

本教頭会では、これまで継続して取り組んだ研修テーマ「小中一貫教育」を平成28年度から「教育行財政」に変更しました。今年度から3年間本教頭会に課されたテーマ（「教育環境整備に関する課題（2）教育行財政」）の実践にすみやかに移行するためです。今年度は、上越地区ブロック研究大会で提言発表を行います。

本教頭会は、何より会長を中心に会員の“和”を大切にし、教頭の資質向上を図っています。昨年度も、柏崎市で開催された上越地区ブロック別研究大会では、準備、運営等で協力し合い、有意義な会になりました。定例会や懇親会での情報交換の場も多く、横のつながりが強い組織であり、一会員としてとても心強いものがあります。



「継承と発展」を目指して

南魚沼都市教頭会
副会長 小宮山 仁
(南魚沼市立六日町中学校)

南魚沼都市教頭会は中学校7校、小学校20校、特別支援学校1校の計28校の教頭で構成されています。30年度には五十沢、大巻、城内の3中学校が統合されて八海中学校が誕生します。また、31年度には大巻小学校と五日町小学校の統合も決定しています。会員が少しずつ減少していく現状にあるため、会長を中心に今後の組織や会の運営の見直しを進めています。

会員の減少はやや寂しい感もありますが、会の活動は一層充実し、成果を上げています。28年度には魚沼、小千谷両市の教頭会と共に、第10回中越ブロック研究大会を主管させていただきました。中越教育事務所、県教頭会、中越管内の各教頭会の皆様等に多大なお力添えをいただき、成功裏に終わることができたと自負しております。ここで得た貴重な学びを、これからの研修や会の運営、そしてなによりそれぞれの職務に生かせるよう努めています。

当会では、会全体としては年間4回の研修会を設けています。29年度は28年度に引き続き「特色ある学校づくりを推進するための教育課程の編成と教頭の役割」を主題とした研修を進めています。識者による講演、中学校区ごとのグループ及び全体での協議、施設見学など、機に応じた実のある研修を重ねてきました。より緊密で実効性のある学校間の連携、家庭・地域との連携の在り方を全員で模索、検討し、互いに刺激し合っています。

また、何と云っても研修の後の懇親の場が、私たちの活力の源です。教頭会に出かける際、どの会員も必ず各校長先生から「盛り上がってこい！」と激励(?)を受けます。校長先生方も、かつてこの教頭会で会員相互の絆を深め、様々な面で支え合い、高め合ってきた経験をおもちであればこそその激励であると受け止めています。

このよき伝統を受け継ぎ、更に会の発展と会員の資質・能力向上を目指して努力していきます。

郡市教頭会ネットワーク



研修を核に 絆を深める教頭会

村上市岩船郡小中学校教頭会
会長 見原 仁
(村上市立神納小学校)

村上市岩船郡小中学校教頭会は、新潟県の県北村上市と岩船郡の小中学校教頭32名、村上中等教育学校・村上特別支援学校教頭2名、計34名で構成されています。3年前に小中の教頭会が一つとなり発足しました。

当教頭会は、研修部の活動を中核とし、3月を除く毎月、定期的に研修会を実施しています。今年度は「自らの生き方を選択していくことができる子どもの育成～教職員の意識を高め、キャリア教育を充実させるための教頭の役割～」をテーマに、研修を進めています。6月には、村上市教育委員会指導主事をお招きし、村上市が行っている「郷育」に基づくキャリア教育の推進についてのご指導をいただきました。今後は、各校のキャリア教育に関する実践を全員がレポートにまとめ、中学校区単位で意見交換を行い、連携の在り方について協議します。また、キャリア教育の更なる充実のため、教頭としてどのように関与し、どう働き掛けていけば良いのか研修を深めていく予定です。

さらに、今年度は、県教頭会で「子どもにとって張り合いのある学校生活づくりを推進するには」をテーマに、2Aの発表を行います。教頭会の2年間の取組と、教頭の継続性、協働性、関与性について検討を重ねてきた成果をまとめました。

また、例年、年度始には郡市校長会長を、年度末には村上市教育長をお招きしての研修を行っています。郡市の教育課題解決に、教頭としてどのようにかわり、取組を推進していけば良いのかについて具体的にご指導いただいています。

一方、日々の業務、報告等についても毎回情報交換を行っています。対応に悩む場合などは互いに連絡を取り合いながら、業務改善等に努めています。

今後も研修を深め、ネットワークをより強固にし、村上市岩船郡の子どもたちのために、教頭としての資質・能力を高め合っていきたいと考えています。



支え合い、力を高め発揮する 教頭会を目指して

阿賀野市小・中学校教頭会
会長 六井 和幸
(阿賀野市立水原小学校)

阿賀野市小中学校教頭会は、小学校8名、中学校4名の教頭からなる組織です。児童数の減少により小学校2校が統合され会員減となりましたが、一人一人が一役を担い、教頭としての力量を高め、阿賀野市の教育に貢献できるよう活動を行っています。

毎月の定例会では、市教育委員会の管理指導主事様、市教育センター長様からのご指導や、年間の研修計画に基づいた研修に加え、様々な情報交換も行い、日々の職務遂行に役立てています。

会の運営は事務局が行いますが、全会員が研修部と教養部のどちらかに所属し、各取組の中核となって活動を進めています。

研修部では、研究大会への発表に向けて研修し日々の取組の改善を目指しています。昨年度は、下越Bブロック研究大会で小中連携の取組について発表しました。小中連携を推進するための教頭としての関与の在り方を見直すよい機会となりました。

今年度は、学校教育の一層の充実を目指して、学校事務職員の方々と「学校財務」に関する研修会を実施しました。また、阿賀野市が推進する「コミュニティ・スクール」についての研修にも取り組んでいます。

教養部では、阿賀野市の産業や文化の専門家に学ぶ研修を実施し、自らの体験を豊かにするとともに、各校の地域連携の充実に努めています。今年度は、阿賀野市の行政マンとしての勤務に基づいた講話を学校教育課長様からお聞きすることができました。また、各種懇親会を通して会員相互の親睦を深めています。

教頭会の活動を通して、会員相互の力量を高め合う絆が強くなっていると感じているのは、私だけではありません。これからも、お互いのよさを認め合い支え合いながら管理職としての研鑽を積み、阿賀野市の教育の発展に寄与する教頭会を目指して取組を推進していきます。



目標を共有し、個性を生かす 教頭を目指して

妙高市立妙高小学校

二瓶 昭夫

教頭として初の夏休みも終わり、始業式には日焼けした元気な子どもたちの顔がそろいました。

これまで、素直な子どもたち、理解ある保護者、協力的な地域の方に囲まれ、実り多き教育活動を進めることができました。校長先生から丁寧なご指導をいただき、教頭として必要な職務についても学んでいます。今年度からスタートしたコミュニティ・スクールも会議や研修を重ね、2学期から小中合同遠足や文化祭で連携して活動するための準備をいよいよ本格的に行います。全公教研究大会では、元全日本サッカー監督の佐々木則夫氏が、「監督は、教頭のようなもの。目標を共有してポイントを伝え、個性を光らせることが監督の仕事」と話されていました。これまで以上に連携を深め、妙高小の子どもがもっと個性を生かして輝けるよう、私は日々努めて参ります。ご指導、よろしくお願いいたします。

新入会員の
声



地域貢献の視点を忘れずに

小千谷市立東山小学校

湯谷 俊彦

新任教頭になって5ヶ月が過ぎました。教頭としての様々な仕事に取り組みながら、まだまだ勉強しなければならないことが山積していることを思い知らされます。

勤務校である東山小学校は、豊かな自然と人情に恵まれ、国の重要無形民俗文化財である「牛の角突き」のお膝元です。日々の教育活動は地域の多大な協力に負っています。ただそれに甘えるのではなく、「学校として地域に何ができるのかを考えないといけない」と勤務校の校長先生から常々言われています。

地域連携とは、学校が地域のお世話になるだけでなく、教育活動を通して地域に貢献し地域に活力を与えることが大切だ、と考えを新たにしました。教頭としての力量を高めつつ、勤務校の地に何ができるのかを常に考え続けていきたいと思えます。



日々明朗、日々努力

見附市立今町中学校

大淵 宏

「救急車呼びますか？教頭先生」赴任早々、生徒が部活動中に悪寒、そしてじん麻疹を発症。横にしたら、落ち着いてきた生徒を前に、養護教諭からの声。校長先生は抜けることのできない会議中。

教頭の職務は多岐にわたることを実感する日々です。施設管理、書類作成や各種報告、PTAや地域との連絡調整、生徒に関する情報を受け、対応の指示、授業担当など。そして、校長先生や先生方との関わりの中で、日々、その責任の重さも感じます。

校長先生、市教頭会の先輩方、そして、職場の先生方からのご指導、声をしっかりと心に刻み、そして、優しさに甘えることなく、自己研鑽に努めます。

先ほどの件も、養護教諭からの言葉のおかげで、適切な対応がとれ、大事にいたりませんでした。

教職の基礎・基本に立ち返り、生徒・地域・先生方のために、「日々明朗、日々努力」を心がけます。



つながり湯之谷小

魚沼市立湯之谷小学校

渡邊 進

この4月に校名を「井口小学校」から「湯之谷小学校」に変え、ピカピカの新校舎で、ピカピカの「教頭1年生」として気合十分で臨んだつもりでした。しかし、教頭の職務である「校長を助け…」の部分は、助けるどころか足を引っ張ってばかり。「校務を整理し…」の部分は、目の前の仕事を処理するだけで精いっぱいという4カ月だったと反省しています。2学期以降もすぐには改善できないかもしれませんが、校長先生から厳しくも温かいご指導をいただきながら、少しずつでも教頭として成長していきたいと考えています。

今年度の当校のスローガンは「つながり湯之谷小」。学校と地域をつなぎ、先生方同士をつなぎ、子ども同士のつながりを深める教頭を目指して、一歩ずつ前に進んでいきます。諸先輩方からのご指導のほど、よろしくお願いいたします。



いろいろな人との 「つ・な・が・り」

新発田市立東豊小学校

鈴木 智博

「たいへんでしょう？」出会う方にねぎらいの言葉をたくさんいただきました。私は決まって「大変なのかどうかわかりません」と答えています。教頭という仕事としての比較するものがないからです。3月末、引継会で最初に言われたことは「まずは地域へ積極的に足を運ぶこと」でした。毎月、学校だより等各種の案内を各区長等へ配っています。一見無駄な仕事と思われそうですが、直接自分の目で地域を見ることでいろいろな情報を得ることができます。ある区長に呼び止められて、缶コーヒー片手に玄関先で地域の現状を知ることもありました。また、当校は2つの中学校区に属しており、健全育成協議会も2つあります。2つの事務局として大変ではありますが、それぞれの組織のノウハウを生かして学校経営基本方針「コミュニティースクール化推進」に向けて「つながり」を大切にしながら日々邁進していきます。



「教頭」という職務を 実感する時…

五泉市立五泉中学校

高山 雄一

教頭になり、毎日が激しく流れます。職員対応、生徒対応、保護者対応、来客や電話対応、工事業者の対応、様々な事柄が自分に集まってきます。「ちょっと待って！」と叫びたくなることもたくさんありました。慣れない単身赴任、長時間の勤務、襲いかかるクレーム、突然の大雨による避難所開設など、わずかな期間でも困惑することもしばしばでした。しかし、猛烈な忙しさの中でも「人から頼られる」という状況にうれしさを感じることも時々あります。報告・相談を受け、判断を求められ、自分がいるからこそ学校が組織として一つの機能をもって動いていると実感しています。学校がうまくまわることによって、先生方が意欲をもって教育活動に打ち込み、その先にいる子どもたちが育つ…。学校は人が育つ所だとずっと思っていました。が、教頭としての立ち位置はそれを一層感じることができます。



職員のニーズに 応えられる管理職に

佐渡市立両津吉井小学校

小田 俊裕

教頭になると、職員が頻繁に自分に声を掛けてくれる。学級の子どもや保護者のこと、研修のこと等々、様々なことを相談してくれる。それに対して私も何かしら応えるのだが、その後には相手が納得した表情をしていると安心する。しかし、首を傾げながら席に戻る様子を見ると、不安にかられてしまう。相手が何を自分に求めているのかは状況によって異なる。笑顔で聞いてもらい、承認の言葉を求めているのか、瞬時に的確な答えを求めているのか。相手のニーズを見極め対応していかなければ、「報・連・相」が大事だと言っても、それをやる意欲がなくなってしまう。「報告してよかった。」「相談して助かった。」と相手が思えるように、管理職として対応しなければならない。そのためにも学校全体の動向をしっかりと把握し、職員のニーズに応えられるよう努めていきたい。



「脚下^{きゃつ か しょうこ}照顧」を 忘れずに

胎内市立胎内小学校

彌源治 仁 伺

自宅の玄関にこの言葉が掲げられています。もとは禅語。「脚下照顧」には、人は他人の事はよく見えるけれど自分の事はよく見えないということに対しての戒めとでもいうのでしょうか、自分の足もとを見て自分の心を振り返り、現在の立場をよく見極めて行動しなさいという意味があります。

この言葉を毎日見ていると、親や先生などから「履物はそろえて・・・」と言われたことを思い出します。親や先生にとっては“行儀よく”という意味合いだったかもしれませんが、「脚下照顧」の最もわかりやすい教えがそこに込められていたのだと思います。

現在、教頭として胎内小学校に着任して5か月が過ぎました。来校された方々、または相談に来た職員に対して誠実に、そして丁寧に話を聞き、じっくりと落ち着いて対応できたかどうか、反省すべき事が多くあります。また、子どもたち、保護者、地域の皆様にとって学校がさらに魅力的な場所となるように、教頭として今まで以上に多くの皆様のお力をお借りすることになると思います。

まだまだ慣れないことばかりではありますが、校長先生、他の教頭先生からのご指導を受けながら「脚下照顧」の気持ちを忘れず、日々の業務に邁進して参ります。ご指導よろしくお願ひします。

特集
学力向上

主体的・対話的な学びの具現に向けた
国語科指導の取組



長岡市三島郡小・中・総合支援学校教頭会
高橋 重人
(長岡市立栃尾東小学校)

1 はじめに

本校は、平成27・28年度に新潟県小学校教育研究会から、国語科の学習指導改善調査研究事業の実践校に指定され2年間研究を進めました。

新学習指導要領の改訂の方向を踏まえ、国語科におけるアクティブラーニングの在り方を検討しました。そして、子どもが主体的に文章構成や表現をとらえたり、自らの思いを意欲的に表現したりする姿を目指して進めた実践研究の概要を紹介します。

2 研究実践の概要

(1) 研究主題とその意図

研究主題を「主体的に文章の構成や表現をとらえ、自分の表現に生かす子どもの育成」と設定し、目指す授業改善の視点を、学習指導改善調査の結果や学力検査等の結果と本校教員の国語科指導の課題から、次のように設定した。

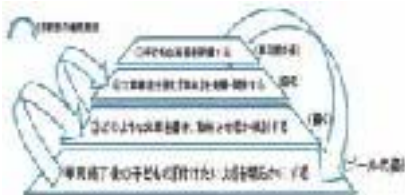
- 文章の構成を学び取り、自分の表現に生かすような学習を展開し、思考力・判断力を育てる。
- 国語科と総合的な学習の時間、生活科、特別活動等との関連を図り、実生活に生きる活動のゴールを設定した単元を開発することで、主体的に学ぶ意欲を高める。
- 「対話的な学習活動」を取り入れ、子ども相互の学び合いにより、思考の深まりを促す。

(2) 研究の内容（具体的授業改善）

《単元構想における改善方策》

① 他教科等と関連を図った単元構成

文章の内容理解の指導だけでなく、文章構成とその効果、筆者の主張と根拠となる事実との関係などをとらえ



させ、自分の表現に生かせるように読むこと、書くことの関連を図った単元を構成する。

②単元ナビゲーションの活用

子どもに単元の追求の流れを示す図を「単元ナビゲーション」として提示する。言語活動のゴールに向けて追求段階を子ども自身が把握しながら学習を進められるようにする。

《1 単位時間における改善方策》

①理由を裏付ける事実や根拠を大事にした授業

言語活動を通して言葉の特徴や使い方などを理解できるようにする。そのために「自分の考えの根拠」や「理由を裏付ける事実」等を子ども自身が明確にしていけるように教師が働き掛ける。

②対話的な活動から思考の深まりを促す授業

- ・子どもの追求に即し対話の必然性を生み出す学習課題を設定し、活発な対話に向けた意欲を高める。
- ・対話の際、ホワイトボード等を活用したファシリテーショングラフィックの手法を取り入れ、対話の可視化や対話の内容を明確できるような支援を行う。
- ・新潟青陵大学の岩崎先生の指導を参考に、対話スキルを活用する授業のポイントを作成した。



3 おわりに

この研究をもとに新学習指導要領の目指す、「深い学び」の具現に向けて実践研究を更に重ねています。



随

想



教師の生き様

十日町市立鑑島小学校

丸山 智

自分の生き方に影響を与えた出来事を紹介します。「あの子（東日本大震災で被災した子）たちの前に、どんな気持ちで立てばいいのですか。家族を失い、家を失い、友達を失い、地域を失い…ありとあらゆるものを失った子たちです。教師としてどんな言葉を掛けてあげればいいのですか…」

この言葉は、「震災と復興」という問題について学んだ際、新採用で被災地に赴任した先生が涙を流しながら私に問いかけてきた言葉です。残念ながら、私は、その先生に対して語る言葉ももち得ていませんでした。あの先生の覚悟に比べれば、私の教師としての生き様は、本当に薄っぺらなものでした。

そんな私が、教頭職を拝命し、学校運営の一翼を担っています。日々、焦る気持ちを抑えながら、緊張の日々を過ごしています。困った時、悩んだ時は、先輩方からの教えに立ち返るようにしています。

「丸山教育学を 丸山教育愛を 児童、職員、地域に注ぐこと」

「与えられた地で、児童、保護者、地域のために全力を尽くすこと」

これらは、初任校と2校目のとき、先輩からいただいた言葉です。今考えると、先述の先生に掛ける言葉は、「その時、その先生（人）にしかできない教育を」という言葉がふさわしかったのかもしれませんが。どんな言葉を掛けたとしても、失ったものは戻ってきません。また、全ての傷ついた児童たちを癒す「魔法の言葉」は、存在しません。だとしたら、教師は、全ての児童たちを支えていくために、どんな言葉を掛けたらよいのでしょうか。私はその答えの一つが、「目の前の児童たちに、自分の教育信念、教育愛を含めた言葉」だと考えます。このことは、教頭として、職員、保護者、地域の方々と接する場合でも同じだと思います。

「自分なりの言葉」を掛けることができるように、謙虚に学び続けていきます。



幸せになる習慣

阿賀町立阿賀津川中学校

横山 雅史

「風呂上がりのアイスクリームで私は太りました。」「部活動の現役時代、毎日の柔軟体操でケガをしない体を作りました。」生徒に習慣の大切さを話す時、よくこんな経験を例に挙げます。

どんな辛い行動でも、はじめは意識してやっていますが、3日続ければ違和感がなくなり、1週間続ければやるのが普通になります。そして、1ヶ月続ければやらないと気持ち悪くなります。

無意識のうちに習慣でやってしまうこと。その習慣が、その人の体や心、思考を少しずつ変え、その人の健康や人生に大きな影響を与えます。

「どんな習慣を身に付けるか。」それが、幸せになるための土台だと感じます。

省みて、今の私の習慣は何でしょう。思いつくのは「歩くこと」でしょうか。朝、生徒が登校する前。夕方、生徒が下校した後。日中も可能な時間を見つけて、校舎を回ります。「いつもと違うところはないか。」机の整頓の様子。掲示物の変化。用具の片付け。巡視で見える一面から、クラスや部活動の勢いや心構え、指導の跡、職員の思いなどが見えてきます。「一事が万事。」「魂は細部に宿る。」です。

ポケットにいつも万歩計を入れています。1回の巡視で3000歩近く。1日を終える頃には、1万歩を越えています。ある研究結果では、4000歩でうつ病、7000歩でガン、骨粗しょう症、8000歩で高血圧、糖尿病、10000歩でメタボリックシンドロームの予防になるそうです。

学校で、行事や授業、部活動等、同じ事を繰り返すことは、新たな議論も必要なく運営はスムーズです。しかし、この学校の習慣を変えなければ、新学習指導要領の趣旨の実現や多忙化解消は図れません。

「学校がどのような習慣を身に付けるか。」微力ですが、見通しと作戦をもって、「学校の習慣」を少しずつ見直し、学校のメタボ解消、健康増進、活力アップを図っていきたいと思います。

新潟県小中学校教頭会

[事務局]

県教頭会ホームページ

全国公立教頭会ホームページ

〒950-0911 新潟市中央区笹口2丁目7-17 和田ビル2F

E-mail n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp

http://kenkyoto.ngt.ed.jp/

http://www.kyotokai.jp/

TEL (025) 244-8225

FAX (025) 244-5060